KANSAI
UNIVERSITY

教職支援センター年報

2018

関西大学　教育推進部
教 職 支 援 センター

『 教職支援センター年報 2018』 目次

投稿原稿

新科目「歴史総合」の実施に対する大学教職科目の修正案
－これからの地歴科・公民科教員に求められる新たな教材研究について－
神戸学院大学共通教育センター特任講師　鵜飼　昌男・・・・ 1
「子どもを救え」―いじめと学校の権力　非常勤講師　印藤　和寛・・・・ 12
新しい国語教育への息吹　非常勤講師　桝井　英人・・・・ 21

1. 教員の養成の目標

関西大学教職支援センターの基本理念 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

2. 教員の養成に係る組織

教員の養成に係る組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
教職支援センター規程 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

3. 教員の養成に係る授業科目

教職に関する専門教育科目および科目担任者一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

4. 教員免許状の取得の状況

各学部・大学院で取得できる教員免許状の種類・免許教科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
介護等体験　参加者数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
中学校・高等学校教育実習生数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
教員免許状取得状況・免許取得者数一覧（学部・大学院） ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
教員免許取得までの諸手続き ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

5. 教員への就職の状況

教員採用試験合格者状況・合格者数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
教員採用試験「大学推薦」の応募状況・合否結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49

6. 教員の養成に係る教育の質の向上に係る取組

介護等体験事前指導について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
2 年次生対象「教育実習受講希望者ガイダンス」について ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
3 年次生対象「教育実習ガイダンス」について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
教員養成フォーラムについて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
教員採用試験合格者との情報交換会について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
教職専門科目担当者研究会について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
教員採用試験合格者壮行会について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
教員採用試験に向けて～支援制度を積極的に活用しよう～ ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
教員採用試験　受験案内一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
教職支援センター　利用状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64

教職関係ガイダンス日程 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

7. その他

教員免許状更新講習一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
関西大学教職支援センター年報投稿規程・執筆要領 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67

新しい国語教育への息吹

関西大学非常勤講師　桝井　英人

高校の現場、大学の国語科教育法の担当者、そして、高校国語教科書編集委員としての立場から、今、動きつつあることばの教育の実態の一面と見通しをレポートします。

■新しいテストから受け取る課題

センター試験に代わる大学入学共通テスト（2021 年 1 月実施）、新学習指導要領（2022 年 4 月より年次進行で実施）に向かって、高校現場でも具体的な動きが始まっています。

大学入学共通テストは、2018 年度高校一年生だった生徒たちが受験することになります。2018 年 11 月に実施された試行調査（プレテスト）の分析を受けて、現場でもその対策を具体的に模索しています。

モデル問題と二度の試行調査から見えてきたのは、（広い意味での）複数のテキストに対する情報処理の能力を問う、という方向性です。

各大問に複数の問題文が提示されることは、ほぼスタンダードとなっています。２～３種類の文字テキスト、文字テキストと図表、文字テキストと架空の会話文といった形です。

これは、何を意味するのか。

これまでは、一人の著者の文章と対峙し、そのテキストが伝えようとしていることを読み取る力が試されました。テキスト自体が問いを持ち、テキスト自身がそれに答える。読み手は、書き手の問いと同期しつつ、思考の流れをなぞる。センター試験のような選択肢形式であれば、設問と選択肢がなぞり方の例を示してくれているので、本文と選択肢の整合性（矛盾のなさ）を判断できれば正解できました。

しかし、複数のテキストの場合、それぞれのテキストは、その固有の問いと答えを抱えて、私たちの前に並んでいます。それらのテキストをつないで、問いを立ち上げるのは、読み手の視点です。試験問題の場合は、設問がテキスト間のつなぎ方を指示するわけですが、それでも、そこには〈問う主体〉の存在が想定されています。

モデル問題に出た契約文書など、実用文の出題も話題になりましたが、文章の種類は本質的な問題ではないと思われます。いくつもの資料を比較し、結びつけることは、あらゆる言語生活で行われ、必要とされていることです。

現場の課題は、表面的な試験対策にとどまりません。その底に、〈問う主体〉をどのように育てるか、という課題が存在していることを確認すべきでしょう。

■新しい教科書づくり

小中の後を追い、高校の教科書づくりが本格化しています。検定は 2020 年に予定されています。

まず問題となるのが、必修科目である「現代の国語」と「言語文化」の教科書です。二つを合わせた標準単位数は、これまでの「国語総合」と同じ４単位ですが、その内容は大

きく変わります。

例えば、「羅生門」を載せようとするなら、「言語文化」で扱わねばなりません。「伊勢物語」もまた「言語文化」に載ります。指導要領が、「古典及び近代以降の文章」と指定しているからです。指導要領の『解説』は、生徒の古典に対する意欲が低い、それは、言語文化への理解に問題があるからだ、だから、古典から現代に至る言語文化への理解を深める科目を新設した、といっています。

一方、「現代の国語」には、「論理的な文章及び実用的な文章」という指定があります。目標に「実社会に必要な国語の知識や技能」という語句もあり、実社会で必要な、実用的なことばの力が打ち出されています（実社会ということばは、現行指導要領にはありません）。『解説』は、話し合いや論述の学習が不足している、しかし、それらは実社会での活動と関係している、だから、実社会で必要な力を育てる科目を新設した、といっています。

文章の種類や分類の仕方以上に重要なのが、教科書の構成の問題です。目次立ての問題といってもいいでしょう。これまでは、目次を開くと、教材名、すなわち、作品名が並んでいました。どんないい作品を見つけてくるか、が編集作業の中心でした。

しかし、これからは、「こういう力をつけるための、こういう活動をする単元です」という項目が中心になります。教材は、活動のための資料の一つという位置づけになります。能力別、活動別、教材別。どのように教科書を構成していくか、ということが、教科書づくりの中心課題となります。

■現場で始まっている試み

このような変化は、直接、日々の授業と関係してきます。

現場の課題は、学習指導要領や新テストが要求してくる問題を、それぞれの現場で、どのように自分たちの課題として受け取り直すか、というところにあります。

以下、筆者の勤務校での取り組み報告の一部を引用します。

国語科　取り組み例とねらい

指導要領や大学入試がどう変わるかということを超えて、これからの時代を生きるひとりひとり、そして、（地球規模という意味も含む）社会を何とか生き延びさせるための母語の力を少しでも育むこと。切実な危機意識の上に立って授業を考えています。

以下は新入試を受けることになる１年生での試みの一例です。

１　問う　ポイント＝自分たちで問いを見つける

（授業例）「羅生門」に問いかけ、問いを見つけ、班で問いを選択し、班で考え、書き、発表し合う。

（ねらい）何かを読むときに浮かんでは消えていく〈内語〉としての問いを、立ち止まって捉え、共有し、テキストに問いかけ合うことで、深い気づきを得る経験をする。

（結果）生徒の感想例

・本を読んでいて浮かぶ、いつもならスルーするような疑問に焦点を当てて読むのは面白い。
・今回自分たちで作った問いには明確な答えがなかったので、自由に議論することができて、本当に楽しかった。
・羅生門は、作者の意見や気持ちを読み取る物語ではなく、読者が考え、作る、物語だった。
・自分一人では気づくことのできなかった話の核心や作者が投げかけている問いなどに、他の人の意見を見聞きすることで、気づかされることも多かったので、面白かった。
・点がつながって線になり、面になり、立体として物語が立ち上がってくる感覚があって面白かった。
・僕は国語があまり得意ではなく、人物の心情や情景がなにを表しているかなんてまったくわからなかったが、羅生門ではけっこう理解できた。
・今まで、「物語を読み、自分たちで問いをつくり、その問いに対する答えを議論する」ということをしたことがなくて、今回初めてそのような感じで物語を読んだが、今までよりも深く内容を理解することができた。

２　書く　ポイント＝説明ではなく、描く

（授業例）「もぐもぐエッセイ」を書こう。村上春樹「自己とは何か（あるいはおいしい牡蠣フライの食べ方）」を読み、説明ではなく、〈描く〉ことの効果に気づいた上で、「好きな食べ物」についてのエッセイを書き、読み合う。描かれたものの向こうに〈そのひと〉が読み取れることを学ぶ。（→「羅生門」へ続く）

（ねらい）高校入試のための小論文練習でガチガチになったことばをやわらかくすること。以前から生徒のことばの回路のかたさ、浅さ、を問題視していたが、その柔軟体操、リハビリとして。まずは、自己にふれつつ、負荷の少ない課題を。

（結果）教育用 SNS に作品を投稿させたので、友だちという読者を意識し、少し気張り、ことばを選びつつ、しかし、すなおにほほえましく書いていた。見られながら書くことへの導入になった。**（その後）**近現代短歌の学習では、自分が選んだ歌がおしまいにくるような「歌物語」を創作する、という課題によって、鑑賞と表現、及びその共有をめざしたが、抵抗なく書いていた。作品に多様性が出てきた。

３　学び合う　ポイント＝手軽なツールの活用

（ツールの紹介）

①現代文、古典を問わず、多くの活動で教育用 SNS（※）を利用した。ひとりひとりの

意見や成果の集約・共有がやりやすくなった。「絵を書いて写メを撮ってアップ」といった、ちょっとした使い方も。生徒もコメントをつけ合ったり、自学問題集の質問を投げかけてきたり、自主的に活用するようになっている。電子黒板もいいが、方法論的には一斉授業の延長線上にあるツールという性格が強い。SNS は、個別性、共有性、記録性といった点で質的な違いがある。

※ネット上でフリーで使えるもの。教員が全て管理できる。生徒はスマホやパソコンから投稿。

②正解が一つではない問題が含まれている問題集を使用。思考力・判断力・表現力を鍛えると銘打たれている。授業では、これを利用し、さらに、「正解例の根拠自体を問う」ことを意識させている。

立ち止まって問いかけ、考え、交換する、そのためのことば。その根底で働く母語の力こそ、古くて新しい課題です。それは、戦後、新しい社会を主体的に形成しなければならなかった時代に意識化され、今もまた新指導要領が、求めているものです。「問いを与えられる→その正解を忖度する。説明してもらう→覚える」という次元を超えたいと試行錯誤中です――。

この報告の中にも、先に触れた〈問う主体〉という課題が含まれています。

問いを立て、考え合い、表現する。ここには、内語も含めた、ことばの回路のやわらかさ、なめらかさ、豊かさ、強さ、深さ、といったものが要請されるでしょう。現実に機能することばの力を耕すためには、実社会のことば、にこだわる必要はありません。ことばの種類を分断する必要もない。実際の教室では、利用できるあらゆる素材を使ってこそ、指導要領が求めるものを、もっともよい形で実現できるのだと思います。

■若い世代の活躍

そのためには、教師自身の実力を増すことが必要です。特に若い世代は、「明日の授業をなんとかするためのヒントと技術」と「自分の教材研究の実力」を求めています。

2018 年７月に開かれた「大阪国語教育アセンブリー2018」では、関西大学出身の教員をはじめ、大阪で勤務する五人の若手教員が一つの分科会を担当しました。

以下はそのレジメの一部です。

◆ 第１分科会　〈出し合いながらひらく〉　明日へ繋ぐ「悩み」と「挑戦」

■分科会主旨　経験１、２年。まだまだ青い私たちの毎日は、「困った」「しまった」の繰り返しです。その中でも、もがきながら試していることもあります。そんな悩みと挑戦を共有し、皆様に意味づけていただければ幸いです。力を貸してください！

■１　府立高校２年目　１年生担任

〇困っていること　・古文の文法に対する動機づけ　・教材研究の中で、生徒のつまずきポイントがわからない　・教材を教えるということと教材で教えるということ

〇やってみていること　　・表現させること　　・SNS の活用

■２　府立高校２年目　１年生担当
〇困っていること　・教材研究の仕方　・生徒にどんな力をつけさせるかを明確にするのに苦労している　・生徒が躓くポイントを把握できない　・創作の要素が強い課題の扱い（フィードバックや評価基準の設定あり方）　・自身のスキルを磨くためにどのようなことに取り組めばよいか
〇やっていること　・感想文　・小説の展開を予想してみる　・品詞分解・現代語訳の解説を考えさせ、発表させる
■３　私立中学校・高校１年目　高校２年担当
〇困っていること　・クラス間の学力レベルの差が大きいにも関わらず、コースが同じであるために定期テストの問題を統一しなければならないこと。学力の高い生徒に合わせると苦手な生徒がついてこれず、苦手な生徒に合わせると学力の高い生徒から不満が出てくるという状況で、どちらに合わせて進めていくべきかがわからない。
・授業時数が他コースに比べて少ないにも関わらず、他コースと進める内容が同じ。
〇やっていること　・紙芝居（←山月記を小学生向けに）　・生徒に教員役をさせること（←学力トップのクラスのみ）　・グループで品詞分解（←得意な生徒が苦手な生徒に教える）
■４　府立高校２年目　１年生担任
〇困っていること　・生徒の学習到達度を知ることができるテストの作り方　・共通の授業プリントでオリジナリティを出す方法
〇やっていること　・答えに幅のある記述問題　・授業プリントの、あらすじ・感想欄
■５　府立高校３年目　２年生担任
〇困っている（いた）こと　・国語に対して興味を持たせられなかった　・遊びながら学ぶためにはどうすればいいだろうか
〇やってみていること　・国語の授業を潤滑油にして、生徒と生徒のつながりを持たせる　・なるべく自分が教壇で喋らない授業（をしたい）

当日の協議では、さまざまな経験をもつ参加者から、若者の共感の声、自分の試みの報告、ベテランからの助言などが寄せられ、意見が交わされました。

全体会で講演した、元文部科学省主任視学官の田中孝一さんからは、「公教育を行う学校には、社会が求める役割がある。しかし、教育の質を担保しつつ、先輩から教えてもらいながらも、自分の個性を発揮しよう、という志と実践が大切だ」という助言をいただきました。

分科会のメンバーは、その後、定期的に勉強会を持つようになり、さらにその輪が広がっています。勤務している学校の実態はさまざまですが、共通の問題を話し合ったり、学校を超えて、アイデアや教材を共有したりする中で、料理の仕方は異なっても、本質的な部分はどんな現場でも通用することなのだ、という認識に至っています。ここには、私の同僚や関大で国語科教育法を担当したひとたちが含まれています。私も若い人たちに交じって、本質を捉えつつ、自由な発想で新しいことばの教育を構想したいと思っています。